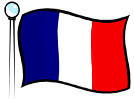


西宮ロット・エ・ガロンヌ交流市民の会

2012年11月14日発行 VOL.106 発行者：会長 森田正樹／編集：広報部



提携 20 周年記念 市民の会訪仏団



交流の旅 ご報告特集

10月6～13日、会員18名の皆さんがLEGを訪問。「西宮友の会」の皆さんの熱烈歓迎を受け、街のあちこちを巡り、大いに食べ、大いに飲み、ボディランゲージも交えながらのコミュニケーションを深めてこられました。熱い旅のご報告をどうぞお楽しみください。



★フランスの旅（ワイン編）★

さすが、エールフランス。最初に口にしたのは、エコノミークラスでも本場フランスの「シャンパーニュ」！！機中でもずっとワインを飲み続けていました。

最初の訪問先、FLOC DE GASCOGNE でブドウを収穫した後に試飲した白ワインは、友の会の方の手作りによるフォアグラのカナッペにととてもよくマリアージュしていました。これは、2/3のブドウ果汁と1/3のアルマニャックで造られています。このような天然甘口ワインは貴腐ブドウを使わず、アルコールを添加することで発酵を抑え、ブドウの糖度を残すもので、アペリティフ（食前酒）として飲まれます。帰国後のパーティー用に3本買いました。

この日の午後は、アルマニャックの蒸留所へ。家族経営ながら毎年品評会で金賞を受賞しており、年代別に試飲させてもらって感激。

夕食は、ソモン城でのピンゴゲームで始まり、私はシャンパングラスが当たりラッキー。食事をしながら歌ったり踊ったりで、気が付けば23時。時間を忘れるほど歓迎していただきました。そして、サプライズでデザートケーキに花火が点火され、暗闇が光輝いて皆の拍手喝さいの直後、煙がかなり高い天井に届いて報知機の警報が鳴り響いて、皆ビックリ。これも思い出の一つになっています。

オプションな1日では、後でトリュフの食べ放題のグループの話を聞き、選択誤りか…と若干の後悔があったものの、公式訪問団に同行したビュゼのワイナリーで、河野市長と中川市議会議長のお二人がビュゼのワイン名誉広報大使として、ファンファーレを伴って古式ゆかしく任命される儀式に立ち会うことができたのは幸いでした。いろいろ試飲した後、直売所で値段を見て、安いのにビックリ。たくさん欲しかったけれど、重量オーバーが心配で少ししか買えなかったのが残念。

マリオッタさんの一つ星レストランの庭でいただいたシャンパーニュ、バイズ運河で船に乗った日に農場レストランで出された「鴨のコンフィ」と赤ワイン、カルカッソン又の城壁の中のレストランのテラスで食べた「カスレ(インゲン豆と肉の煮物)」との赤ワイン、ロートレック美術館の隣のレストランの赤ワイン。それらは、1年にワインを200本は飲み、品種、産地、ヴィンテージ等にこだわっていた私のこれまでのワインとの付き合い方を否定するものでした。



日本ではあまり聞かないブドウの品種で造られた地元のワインを地元の料理とともに味わい、地元の人達と、ほんの少しの会話でしたが、皆で楽しい時間とともに飲めたワインの味はこの上もなく最高でした。これぞ、私がフランスに行って得た最大の収穫です。お土産の記念ラベル入り**ピュゼ・ワイン**は、クリスマスに思い出のビデオを見ながら抜栓するのもいいかな

～なんて思っています。(藤川 修平)

★ブドウの収穫★

朝の光の中で初めて見るアジャンは霧に包まれ、小雨模様だった。2012年10月7日(日)。SNCFの駅まで散歩。大通りに面した建物は古い鉄製のバルコニーをもっていて良い雰囲気。まだひと気のない店や、ホテルの前の映画館はやや古びているが、それがかえって町の落ち着きを醸し出している。

朝食後、懐かしい「西宮友の会」のメンバーがぞくぞく到着。カスティヨさんご夫妻、エリエットさん、シリルの顔も見える。約5カ月ぶりの再会だ。

車3台に分乗して、今日の目的、VENDANGE(ブドウの収穫)へ!! 出発の頃には霧も晴れ、幸先上々。アジャン市はガロン又川の運んできた土によってできた土地なので、気温と水温の関係で午前中はしばしば霧が発生することのこと。「午後にはきれいに晴れるわよ」と誰もが口々に言う。

私はマリーエレーヌ(カスティヨ夫人)の車に乗せてもらい、雄大なガロン又川を渡り、南西へ1時間半余り。町を抜けるにつれ、小麦、トウモロコシ、ひまわり畑が両側に広がる。農業国フランスにおいても、特にロット・エ・ガロン又県が豊かな農業地帯であることを実感する。また、刈り取りの済んだトウモロコシの黄金色の茎を見ながら、「大草原の小さな家」のローラの人形が幾つ出来るかしら?と想像して楽しくなった。

ブドウ畑に到着。畑のオーナーさん家族や収穫の手伝いに来ている人達に出迎えられる。はるか遠くまで列をなすブドウの木々には、翡翠色や濃い紫の房がたわわに実り、甘い香りを放っている。私たちはハサミとバケツを受け取り、畝へ走る。犬も走る。歓声を上げながらハサミをいれる。茎からブドウの汁が滴る。バケツ一杯のブドウは意外に重く、トラックにあけに行くにもドッコイショ! 30分も経つと腰は痛いし、ハサミをもつ手の動きが鈍る。収穫作業は重労働だということを実感する。

収穫に至るまでの植え付け、剪定、病害虫の駆除、その上、神のみぞ知る天候との戦い。どれをとっても気の抜ける作業は何一つないのだろう。そして、やっと迎える収穫。農家の方々の日に焼けた顔、ごつごつした手足を見て、ワーワー、きゃーきゃー言いながら、収穫だけしているのが少し申し



訳なく思えた。

が、労働(?)の後の昼食は最高!!! 初めて口にするアルマニャックの芳醇な香り、美味しいワイン、トマ君のお父様が、朝、焼いて下さったパン、その上に広がるフォアグラのパテ、温かいスープ(この地方独特のにんにくのきいた野菜スープ)、会員手作りのクッキーやパウンドケーキ ETC. どれもこれも美味しく、それ以上に心のぬくもりを感じさせるものばかり。

お別れに皆で「さくら」や「ふる里」を歌い、炭坑節を踊って名残を惜しんだ。至福の時を与えて下さった「西宮友の会」の皆さまに感謝、感謝!! (田中 晴子)

★あたたかいもてなしに感動★

フランスへの初めての旅。本当に夢のような1週間でした。関空から12時間の飛行の後、パリで乗り換え、ツールーズに着きました。そこにはAGENの友の会の人達が大勢迎えに来てくれました。



翌日は、AGENの市場へ連れて行ってもらいました。そこには果物、花、野菜、生きたニワトリ、ぶどう酒、チーズ、肉など、物が豊富なので驚きました。見たり、買ったり、楽しいひとときでした。

ロット・エ・ガロンヌは、ぶどう畑や果樹園が地平線まで続いています。車で1時間走っても同じ景色です。きれいな空気ときれいな畑がいっぱい。そして、中世からのお城がいくつもありました。

AGEN市内には、中世からの建物の名残がいくつも残っていました。AGEN市長のスピーチには、ローマ帝国が、ツールーズ→アジャン→ボルドーと作っていったという話がありました。本当に歴史を感じます。

その他、ぶどう収穫参加、お城での家庭的な現地の人達のおもてなし、県庁、市庁での盛大な歓迎会、美術館見学、城塞と大聖堂の見学など、本当に素晴らしい感動の旅でした。フランスの人たちは親切でした。自由時間に町のスポーツ店で買物をした時も、店員さんは嫌な顔をせず、ていねいに対応してくれました。

今回、AGENの友の会の皆様には、旅の初めから終わりまでお世話頂き、ありがとうございました。朝から夜遅くまで、めんどろを見てくださり、本当に感謝しております。

最後に、森田会長はじめ、通訳の佐藤様、御一緒して頂いた皆様、本当にありがとうございました。(新田 耕介)

★中世の面影を残す街★

10月10日(水)8時半、早朝からの霧で幻想的なアジャンの街を後にして、次の目的地カルカソンヌに向かいました。11時半頃、すっかり青空になった中を見晴台から遠景の城塞都市を一望できる場所で一度下車し、遠景を満喫した後、12時すぎにバスを降りて、ナルボンヌ門から城塞内に歩いて入りました。



この城塞都市（シテ）は、ヨーロッパ中世を代表するもので、城壁は外側、内側、伯爵の城と三重にもなっていて、内部がひとつの町になっており、予想以上の存在感がありました。伯爵の城の上からは 遠くまで周囲を一望でき、その昔、こんな風に自分達の町を守っていたのかと うなずけるものでした。

昼食は レストラン「コント・ロジェ」の明るい中庭で、爽やかな風と共に サラダやカスレ（ちょっと塩味が強かった）等をいただきました。夕食後、ライトアップされた城塞を、ガイドさんやトマ君の案内で散歩しましたが、昼間とは印象が違って、夜中の不思議な中世の世界へ導かれたようでした。

10月11日（木）朝7時半にホテルを出発し、バスは山越えてアルビへ向かいます。10時頃、薄曇りのアルビの町に到着。まずは、ロートレック美術館の建物から、赤レンガの街並みやタルヌ川の眺めや、フランス式庭園などを楽しんだ後、11時から美術館内部へ。私はロートレックについてあまり知識がなかったので、伯爵家の子供として生まれ、身体のハンデを持って一生を過ごしたなんて知らなかったし、ハンコのような彼のサインも、1900年のパリ万博での日本の絵画文化に影響された事も、新しい驚きでした。

12時頃、美術館横のレストラン「ラ・タンポラリテ」で、鴨肉入りのサラダ、鶏肉料理等、上質のワインと共に、洗練された味をゆっくり楽しみました。

食後、アルビの旧市街を散策。サン・サルヴィ教会の中庭と回廊など、中世の街並みの美しさに魅了されつつ、要塞のようにそびえ立つサント・セシル大聖堂を訪れ、カテドラルの豪華で荘厳な内陣と礼拝堂に圧倒されました。夕方、町全体がレンガ造りの赤い家並みが続くアルビの町を後にして、トゥールーズのホテルに到着したのは、6時半過ぎでした。

アジャンから友の会の方々と一緒に来て下さったり、空港で合流して見送って下さったりで、フランスの方々への熱い友情に感謝しつつ、帰国の途に着きました。今回の訪仏団に参加でき、NLEGの長く続いた、こうした友好活動にも感謝しています。本当に大切な思い出となりました。（柿本 ゆか子）

★カランドリエ ～20周年記念 番外編～★

20周年記念訪問団に参加する前は中学生の息子を残して出発する不安はあったものの、2012年4月にお会いしたアジャンの方々との再会し、アジャンの街を見たいという気持ちには勝てず、今回のフランス行きを決めました。皆さまの訪問紀行文の通り、毎日が素晴らしい出会いと体験に溢れていました。NLEG訪問団全員が元気に、犯罪に巻き込まれることもなく、帰国の途についたことも、美しい旅をさらに完璧なものにさせるものでした。

充実した毎日ではありましたが、やはり特筆すべきは、毎日お昼と夜の1日2回のフルコース料理と、異常気象による予想外の暑さかと思えます。

帰りのトゥールーズからパリ行きの飛行機の中で隣あったフランス人のおばさまとも楽しくおしゃべりをして過ごしました。やはり今年の夏からのフランスの気象は異常で、初夏は一度冷え込んだそうですが、8月からは一転、ずっと秋までかなり暑かったそうです。「日本までの長旅の安全を祈ってるわ」「パリでの娘さん宅を楽しく過ごしてね」と、別れ



の挨拶をかわしてパリに到着しました。パリでの乗り継ぎはあまり時間に余裕なく、バタバタと大阪行きの飛行機に乗り込みました。

機内では映画でも見て静かに過ごそう、と決めていたのにもかかわらず、まともや、あまり眠ることなく、乗客（NLEG会員以外の方々）とおしゃべりをしてしまいました。飛行機の後方で、長らくパリ在住の日本人女性（おばさんと呼びするにはキレイな方で気がひけます）と、娘さんがイタリアに嫁いだ京都在住の日本人のおじさんと3人で立ち話です。パリのどのデパートで美味しいお菓子が買えるか、イタリア男性のお料理に対する情熱、はては、京料理はどの店が今一番旬か？ などなど。あんなに食べつくした旅行で、もう料理なんて話題ですらお腹いっぱい状態なのに、延々とお料理談義に花を咲かせてしまいました。最後の最後まで、目一杯旅行を楽しみました。

帰国から数日後「おいしい旅行だったなあ」と思い返していた私に、異変が生じてしまいました。腹痛がずっと続き、歩くのも苦しい状態になり、内科を受診しました。そして、処方された薬は…



な、なんと人生初めての便秘薬でした。正確にいうと便秘ではなかったのですが、お腹の中でINとOUTのバランスがおかしかったようです。ここで1日2回のフルコースをたிராげいていた成果

(?)があらわれたのです。その後1週間ほどで元に戻りましたが、みなさまのお腹の調子はいかがでしたか？ ワイン好きの会員のみなさま、肝臓の調子は戻りましたか？
それでも、30周年記念もあれば、また訪問団に参加したいなあと思うほど、フランスからの歓迎を、友情を、心から感じた温かく、最高の旅でした。(藤枝 知子)



日仏 二人の先人を偲んで…

★交流の旅を終えて★

10月6日からの8日間の旅を終え、重量オーバーで追加料金をエールフランスに払った土産のワインを楽しみながら、充実した日々を思い出しています。10年前にもまして楽しい、そして熱い「西宮友の会」の歓迎でした。

市長たち公式訪問団とともに参加した若干強行日程でもあった表敬訪問・歓迎会、懐かしい美しい街並みのガイドツアー、マリオッタさんのレストランに代表される美食の数々、そして「友の会」の友人たちの手厚いアテンドによる朝市見物、ブドウの収穫体験とピクニック風ランチ、トリフ狩り、サイクリング、そしてアジャンを離れて訪れた世界遺産のカルカッソンヌ、そしてロートレック美術館や大聖堂のあるアルピの街並み、などなど、それらについてはメンバー17人の紀行文と写真、新年会での報告、そして来年4月のスケッチ旅行展などでお楽しみください（お土産のアルマニャックもあるよ）。

ところで、この旅は2人の先人を偲ぶ旅でもありました。

20年前にこの友好都市提携を立案し、実現されたフランソアポンセ氏（元ロット・エ・ガロンヌ県議会議長、フランス外務大臣）が7月18日に亡くなられ、提携10周年事業に尽力された市民の会の第2代会長・武居精さんも7月1日に世を去られました、85歳でした。

武居さんと言えば、誰もが思うのはユーモアとウィットにとんだスピーチ、克明な紀行文、料理とお酒へのあくなき情熱、そして絵画に寄せる真摯な態度。毎年、4月のスケッチ展はもちろん、西宮市展や団体展、個展にロット・エ・ガロンヌの風景を出品されてきました。

今回、「市民の会」から「友の会」に記念に贈呈したのは、武居さんの「ネラック」を描かれた油彩作品です。

深い緑と運河とアンリ4世の館のあるネラックの落ち着いた街並みは、とりわけ武居さんのお気に入りの場所で、何度か作品にされています。特に絵画の提供を奥さんをお願いし、頂戴することができました。もちろんマリー会長は大喜びで受け取ってくれましたが、今年4月に日本に行ったときに会っておくべきだったと、涙目になっていました。

また、武居さんが13年前、メザンでレストランをスケッチされたところ、そのレストランのオーナーに絵を所望され「飾ってくれるなら」と渡されていましたが、その絵は今もレストランの壁に掛かっており、私たちもその絵に再会してきました。生前「私の絵はフランスでも飾られている」と諧謔半分、自慢半分で話されていたそうですが、武居さんのネラックの絵は、西宮フレンテの国際交流協会事務室にも飾られています。フランスまで見に行けない人はこちらへどうぞ。

多くの方々のお力によりロット・エ・ガロンヌ県、アジャン市と西宮市との交流が進んできましたが、とりわけ大きな足跡を残されたお二人のご冥福をお祈りしたいと思います。

ともあれ、マリーさんたちの心からの歓待に、こんなことなら4月にもっと歓迎しておくべきだったと思ったのは、私だけではないでしょう。

4月にお会いしたカスチヨ夫妻、マリオッタ、クローディーヌ姉妹、エリオット、シリル、マチューとマリーロールの新婚さん、イザベル、アメリーたち、そして10年前にお会いしたラギュゼールや、ベランちゃんのご両親、オトファージュ、トマなど懐かしい人たち、ロビンや初めて会った「西宮友の会」のみなさん、そして誰よりもマリーに感謝！、感謝！、感謝！ また、会いましょう。
(森田 正樹)



★フランソワポンセ元議長のお墓参り ～虹の架け橋～★

今回、公式訪問団に随行通訳として参加していた佐藤です。私からも一言ご報告。

NLEG一行とは、一部公式行事のみ一緒でしたが、あとは別日程でロット・エ・ガロンヌ県内各地の訪問（ビュゼワインのセラー、ネラック、ボナギル城、デュラス城など）でした。マリー、シリル、クローディーヌ（4月に来日した姉妹の妹さんの方＝シャルトル在住ですが、この期間、アジャンのお姉さん宅に泊まり込んで付き合ってくださいました）が、全日程同行してくれました。

市長、議長、商工会議所会頭ご夫妻、副会頭ご夫妻、国際交流協会理事たちと一緒に、最初こそ多少固い雰囲気もありましたが、次第にガスコーニュ・スピリットに染まっていき、和気あいあいとなごやかに、そして行く先々での見学や出会いに感動しつつ、素晴らしい時間を過ごすことができました。



フランソワポンセ氏のお墓に花束を供える河野西宮市長＝地方紙 SUD-OUEST に掲載された記事より。写真と記事は GERARD RAMAIOLI 氏＝BERANGÈRE のお父さん！！

私にとっては7回目のロット・エ・ガロンヌ訪問で、いわゆる観光名所は知り尽くしているようなものの、今回の旅行で、最も印象が深かったのが、最終日の夕方、ジャン・フランソワポンセ元議長のお墓参りをしたことです。

森田会長の記事でご紹介があったように、ジャン・フランソワポンセ元議長は、西宮との友好提携を推進、調印した方ですが、その背景には、国際的視野に基づく強い理念がありました。父上も外交官（駐ドイツ・フランス大使など）、ご自身は国立行政学院（ENA）という官僚・政治家養成の超エリート校卒業後、フランス外務省勤務、30歳にも満たない若さで、後のEU構想の基となるローマ条約の締結文の構想を練るなど、突出したエリートとして外交官キャリアをスタート、

民間企業勤務を経て、政界へ。1978年ジスカール・デスタン大統領の外務大臣として活躍。同時に、国家の繁栄は地方の充実からという考えのもと、その歴史・風土に惚れ込んだロット・エ・ガロンヌ県の議長（PRÉSIDENT）を、1978～94年と、1998～2004年の長きに渡り務め、1983年からは、上院議員も兼務しておられました。

西宮との提携も、当初は企業誘致を目指しておられたようですが、「まずは人と人との交流を」というフランソワポンセ元議長の提案で、二人の若いロット・エ・ガロンヌの日本語研修生を2年間西宮に送るということから実質的な交流が始まりました。その留学生の一人が、「西宮の友の会」初代会長ギヨームさんのお姉さん、ステファニーさんです。

その後、その返礼事業として西宮から、1996～98年の3年間、青年語学研修団、少年少女柔道ミッション、市民画家のスケッチ旅行が派遣され、その交流を通じて知り合った双方の市民が、現在のNLEGと「西宮の友の会」を立ち上げ、にぎやかな交流に発展してきたというわけです。

提携10周年の際には、フランソワポンセ元議長もマリーさん、ギヨームさんはじめ30人近い訪問団と共に西宮に来られました。歓迎夕食会のスピーチで、「共に食卓を囲んだ友人の国に爆弾を落としたいとは思わないでしょう。市民同士の友情を育むことが、すべての国際平和の基です。」とおっしゃっていたのが忘れられません。国際政治の最前線で活躍されてきた方の言葉だからこそ、とても重みがありました。

このようなフランソワポンセ元議長に、このたびの20周年記念訪問の際に再会できることを楽しみにしていましたが、今年の7月15日にパリで脳梗塞の発作を起こされ、18日に帰らぬ人となりました。奇しくも、武居元会長と同じ月に亡くなるとは・・・10年前アクタの記念イベント会場で並んでテープカットをされたお二人、そして故山田市長、三人とも亡き人となられてしまいました。

アジャン近郊の LUSIGNAN-GRAND(リュシニャン・グラン)という小さな村に埋葬されたフランソワポンセ元議長のお墓参りを提案してくれたのは、マリーさんです。河野市長も大いに賛同され、公式訪問団全員で墓参することになりました。

この日は、朝から県北西部のデュラス方面を訪問し、アジャンへの帰路、LUSIGNAN に寄ったのは夕方、しかも予定より 30 分も遅れてしまい、フランソワポンセ未亡人はじめ、提携時のアジャン市長であるポール・ショレ氏、フランソワポンセ議長時代の県副議長のフォンガロ氏などを墓地の前でお待たせしてしまいました。

雨がパラついたかと思うと、パアッと日が射すというような不思議な天気でしたが、やがて前方に LUSIGNAN の小高い丘が見え、マリーが「みなさんあそこです！ あの丘のてっぺんに、フランソワポンセ元議長のお墓があります」とアナウンス。すると、その丘に向かうバスの前面に大きな、大きな虹、本当に今まで見たこともないような、大地から大地へきれいな半円を描く、くっきりとした虹が現れたのです。



その虹の足元に向かうかのように、バスは進み、丘の中腹で大型バスから小型のマイクロバスに乗り換え（道が細すぎて大型バスが通れないため）、やっとたどり着いたときには、虹は消えていました。

市長からフランソワポンセ未亡人に感謝状を贈呈し、市長、議長が献花、そして訪問団員全員が墓前で冥福を祈りました。

そのあとは村の一角を占める広大な庭のあるフランソワポンセ邸で飲み物を頂きつつ、未亡人とお話ししました。少し涙ぐみながら「夫にとって日本は本当に愛着を持っていた国でした」と、私たちの墓参りを心から喜んでくださり、元議長が仕事をされていたお部屋、お二人が食事をされた部屋と案内していただきました。

友好の種をまかれた方がそこにおられ、たくさんの実を結んでいることを喜んでくださっているような、感慨深い一時でした。（佐藤 祥子）

<編集後記>

訪問団の皆さんの旅行記は、楽しい旅のほんの一部。そのご報告で盛り上がる予定だった忘年会ですが、会場の日程調整がつかず、残念ながら、新年会に持ち越すことになりました。

新年会は、1月13日午後を予定しておりますので、皆さま、日程確保をよろしくお願いいたします！（池本）